

主の公現

2018.1.7

マタイ 2・1-12

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今年も迎えることの出来たこの新年の最初の主日に、教会は毎年、主の公現の祭日を祝います。今日の主の公現の祭日に祝われるのは、クリスマスの旣の飾りや、子供たちのクリスマスの劇などでわたしたちにもなじみ深い、今日の福音に語られている出来事です。わたしたちになじみ深いクリスマスの物語のこの一場面を、何故教会は「主の公現」というような、わたしたちには仰々しく思える名前を持った祭日として祝うのでしょうか。星の光に導かれて、東の国からはるばるやって来た異邦人の博士たちが、幼子イエスの前にひれ伏して拝み、贈り物をささげたことによって、クリスマスの夜、ベツレヘムの飼葉桶に寝かされていたあの乳飲み子がどのようなお方であるのかが、初めて世界に知らされたのです。このことを祝うのが主の公現の祭りです。

今日の主の公現の祭日のことを、ラテン語ではエピファニアの祭りと呼びます。東の国から来た博士たちは、お生まれになったユダヤ人の王・メシアを訪ねて自分たちのほうからイエスのもとにやって来ますが、その彼らの行動を引き起こしたのは主のエピファニアの出来事であったと今日の主の公現の祭日はわたしたちに告げているのです。エピファニアとは、目に見えぬ神の栄光の現れのことを言います。占星術の博士たちは、彼らを導く不思議な星に導かれて、母マリアとともにおられる幼子イエスのうちに、目に見えぬ神の栄光の現れを見たから、その幼子の前にひれ伏して礼拝したのです。博士たちをイエスのもとに導いたあの星の光は、その星のもとにおられる神の子イエスから発する、輝かしい栄光の光の象徴でもあるのです。

教会においてクリスマスと同じように古くから祝われてきたこの公現の祭日にここに集い、クリスマスにわたしたちが祝った神の御子の公現の祭日を祝うわたしたちも、このミサにおいて聖体の秘跡を通してご自分を示しておられる主のみ前に、あの博士たちのように身を低くして、心の底からの礼拝をささげたいと思います。

今日の主の公現の祭日には毎年、今聴いたマタイ福音の箇所が朗読されます。主の公現の祭日に祝われるのは、東の国から来た占星術の博士たちが、幼子イエスを礼拝した、今日の福音が語る出来事だからですが、今日のミサの中で朗読されたマタイ福音書が語る主の公現の出来事にはマタイ福音書の枠を超えたはるかに広い広がりがあります。エピファニアということことば自体は先程見

たように、全ての人のためにこの世界に来られた神の御子がこの世界に住む人々に神からの光を輝かすことを意味するとするなら、その公現の出来事とそれが与える恵みと喜びは、今日の福音に登場する東の国から来た博士たちだけが経験したものではないと言えるのではないのでしょうか。

クリスマスの夜ベツレヘムの厩にお生まれくださった、神の御子を喜びのうちに迎えた全ての人々は主の公現を体験したとも言えるのではないのでしょうか。救い主の誕生を告げる天使のことばと、夜空を光で満たして神をたたえて歌う天使の群れの歌声を聞いて、飼い葉桶に眠る乳飲み子イエスを捜しに急いだ羊飼いたちも、主の公現の出来事を体験したのです。エルサレムの神殿に初めてささげられる幼子イエスを母マリアの手から抱かせてもらった、シメオンとアンナの喜びに満ちたことばと歌も主の公現に接した人の喜びを伝えています。しかし、主の公現の出来事とそれが人々にもたらす神からの喜びは、イエスがまだ産まれたばかりの幼子であった時の出来事に限られたものではありません。

クリスマスの喜びを祝う教会の降誕節は、明日の主の洗礼の祝日まで続きます。大勢の人々に交じってヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになったイエスの上に、天の御父の声が響きます。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」イエスの上に響いたこの父なる神のことばによって、あの博士たちがその前にひれ伏して礼拝した幼子、羊飼いたちが飼い葉桶の中に寝かされているのを見た乳飲み子がどのようなお方であるのか、全ての人々に示されることになるのです。そしてこの洗礼によって開始されたイエスの福音宣教の活動の中でイエスと本当の意味で出会った全ての人々は、主の公現の出来事をその都度体験することになるのです。福音書に語られているイエスによって悪霊や病から解放された人々、目が見えるようにされ、耳が聴こえるようにされ、自分の足で立つことができるようにされ、死の国から生き返らされた全ての人々はイエスのうちに働く神の力のエピファニアを体験したのです。そして、イエスに名指され、全てを捨ててイエスの後に従った弟子たちは、イエスが歩まれた福音宣教の全ての場に立ち会うことを許され、ついには十字架の上に死んだイエスの復活を体験することになるのです。今日の主の公現の祭日に祝う東の国の博士たちが体験した出来事は、こうして福音書に語られることの全ての始まりとなっていると言えます。そのような、イエス・キリストによってもたらされた、イエス・キリストのうちに働く神の栄光の力の現われ、そのエピファニアの最初の出来事の祝いとして、この公現の祭日を教会は祝っているのです。

そればかりではありません。今日の第二朗読のことばをよく味わうなら、今日祝われる主の公現の出来事とは、人間であるわたしたちには誰も思いもつかなかったような、神がお遣わしになった神の子イエス・キリストによって実現

された、隠されていた神のご計画の現われとしてのエピファニアであることが分かります。そしてその最も偉大な神のご計画の実現、そのエピファニアとはエフェソ書のことばによれば、「異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたちと一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者なる」ということです。自分は異邦人のための使徒として神に召されているとの確信のもとに、パウロがいのちをかけて宣伝した福音の核心がここに要約されています。

わたしたちは皆、遠い東の島国である日本に生まれ、それぞれの人生においてカトリックの教会と出会い、そこに伝えられているイエス・キリストの福音を受け入れ洗礼を受けて、キリストのからだである教会に属するものとされ、イエス・キリストの十字架の死と復活によってもたらされた罪のゆるしの恵みと神の子としての新しいいのちをこの身に注がれ、永遠のいのちの約束を受け継ぐ者たちとされたのです。ここに、神がその永遠の御心のうちに秘められていた、わたしたち全ての者のための永遠のご計画が実現され、現れているとエフェソ書は述べているのです。そのように考えるなら、今日の福音が語るあの東の国の異邦の博士たちは、わたしたち自身の姿を映し出していると言えます。わたしたちは皆、イエス・キリストの御前にひれ伏し、その洗礼の恵みあずかることによって、主のエピファニア・主の公現を体験した者たちです。わたしたちの教会は毎年、新しく洗礼を受ける人々を向かえて大きな喜びをともに味わってきました。洗礼式に立ち会うたびにわたしたちが味わうその喜びは、単にわたしたちの教会のメンバーが増えたということに留まるものではありません。わたしたちはその都度、こうしてまた新たな主のエピファニアの現場に立ちあわせていただいている、主は今もわたしたちの中にそのエピファニアの出来事を続けていてくださる、外から来て、わたしたちの目の前で洗礼を受けて、主なる神が与えてくださった喜びをわたしたちに示してくれているその人たちは、クリスマスの羊飼いや、公現のあの博士たちのようだ、そのようにして神は今もわたしたちの中でエピファニアを実現し、わたしたちをその喜びで満たしてくださっている。教会は、今日の公現の祭日をそのように受け止め、盛大に祝ってきたのです。今日のミサにおいて、今も広がり続けるわたしたちのための神の栄光のエピファニアを信仰によって知ることが出来た喜びに満たされてともに祝いしたいと思います。